



歴史的建造物の修復と伝統技術の継承、文化財を次代へ繋ぐ

つるおか のりよし
家政学部 生活造形学科 教授 鶴岡 典慶海を越えた職人同士の対話を重視し、伝統木工技術の未来を拓く
国宝清水寺など約200棟の文化財建造物の保存修理にも携わるコメントできる
研究領域

伝統建築・技法

日本建築史

文化財修復

文化財防災

京都女子大学は、教員の研究活動や社会連携など“社会のための女子大学”の姿をお伝えするニュースレターを発信しています。今回は、国宝や重要文化財など歴史的建造物保存修復の専門技師を経て、伝統建築の構造技法や伝統技術について研究を続ける、生活造形学科の鶴岡典慶教授をご紹介します。

■海を越えて響き合う「職人技」。ノルウェーの伝統木工・造船職人と日本の宮大工が技術交流

日本とノルウェーは共に豊かな森林資源と独自の木工技術を有していますが、これまでの交流は学術研究にとどまり、現場の職人同士が語り合う機会は稀でした。生活デザイン研究所長を務める鶴岡教授は、現場視点の対話こそが伝統技術の継承に不可欠と考え、ノルウェーのハルダングル海事センターより建築修復・伝統木造船建造の職人を招聘。9月には京都・奈良の寺社修復現場の視察や京都市内での木工体験を経て、宮大工を交えたシンポジウムを学内に開催しました。厳しい風土で育まれた北欧の技術思想と日本の木工技術が交わり、職人の技を未来へ繋ぐ新たな国際連携を切り拓いています。

■火災で焼失した清水寺は、なぜ短期間で再建できたのか？ 伝統建築・伝統技術を研究、文化保存に繋げる

鶴岡教授は、京都府教育庁の文化財専門技師時代から国宝清水寺本堂や国宝本願寺飛雲閣など約200棟の国宝・重要文化財の保存修理に携わってきました。寛永年間に江戸初期の大火からわずか3年余りで再建された清水寺の半解体修復調査では、建物にあった墨書きや見えない部分の構造、木材の組み方などを分析。これらを手がかりに、3グループほどの職人集団が分担して工事に関わっていたのではないかと考察しています。長年現場で培ってきた経験と職人ネットワークは、担当科目「伝統技法演習」にも還元されており、学生たちは檜皮葺（ひわだぶき）や宮大工の組手、左官、畳、石積みなど、現代では希少となった職人の技を五感で体感しながら学んでいます。

■慶長伏見地震も倒壊しなかった東福寺。構造を知り災害に備える、文化財防災と舟屋の町並み保存

建造物の構造と強さを解明し、災害から守る研究も鶴岡教授の重要な柱です。慶長伏見地震で倒壊を免れた東福寺の構造・地盤を分析し、南海トラフ巨大地震を見据えた文化財修復について構造専門の研究者と共同研究を展開。文化庁の委嘱による京都府内の世界遺産や国宝建造物の防火・防犯対策調査も行っています。さらに地域連携として、江戸時代の舟屋が連なる舞鶴市吉原地区（“東洋のベネチア”）の町並み景観調査を学生とともに推進。歴史的な町並みを守りながら住み続けられる地域づくりの支援にも取り組んでいます。

鶴岡 典慶（つるおか・のりよし） Profile

<https://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/kywuhp/KgApp/k03/resid/S001769>

略歴 1960年生まれ。関西大学工学部建築学科卒業、関西大学大学院工学研究科中退。京都府教育庁文化財保護課にて文化財建造物の専門技師として、国宝本願寺飛雲閣や国宝清水寺本堂、国宝東寺御影堂をはじめ上賀茂神社、下賀茂神社の社寺関係から同志社クラーク記念館などの近代建築まで、200棟近くの国宝・重要文化財建造物の保存修理などに従事。2020年から京都女子大学家政学部教授、2021年から生活デザイン研究所所長。

論文 『東寺五重塔内部の彩色塗装に関する考察』（単著/2025年/生活造形第70号）

『寛永年間再興の清水寺諸堂における建築的特徴について』（単著/2022/日本建築学会大会学術論文梗概集）

著書 『東山に佇むレトロ建築 太閤垣の建築 一旧吉田永三邸ー』（単著/2024年/京都女子大学生活デザイン研究所）
『鶴清の建築』（共著/2024年/株式会社鶴清）

<本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先>

・京都女子大学入試広報課 岡橋・亀井・竹縄
・京都女子大学広報デスク（ラブレ内） 香川・田村
・京都女子大学HP <https://www.kyoto-wu.ac.jp>

TEL：075-531-7054 FAX：075-531-7222
TEL：06-4708-3766 E-mail:pr@raple.co.jp